

私

は

男

Adult only



# 目次

表紙	イラストレーション	流一本	
中扉	イラストレーション	流一本	
目次			2
こみつく&イラスト (ガールズ&パンツァー)		流一本	3
SS 下着の魔女 (ガールズ&パンツァー)		白朧	13
あとがき&奥付			

## まえがき (ページ調整のため)

くろうさぎ  
白朧  
くろうさぎ  
白朧  
くろうさぎ  
白朧  
くろうさぎ  
流一本

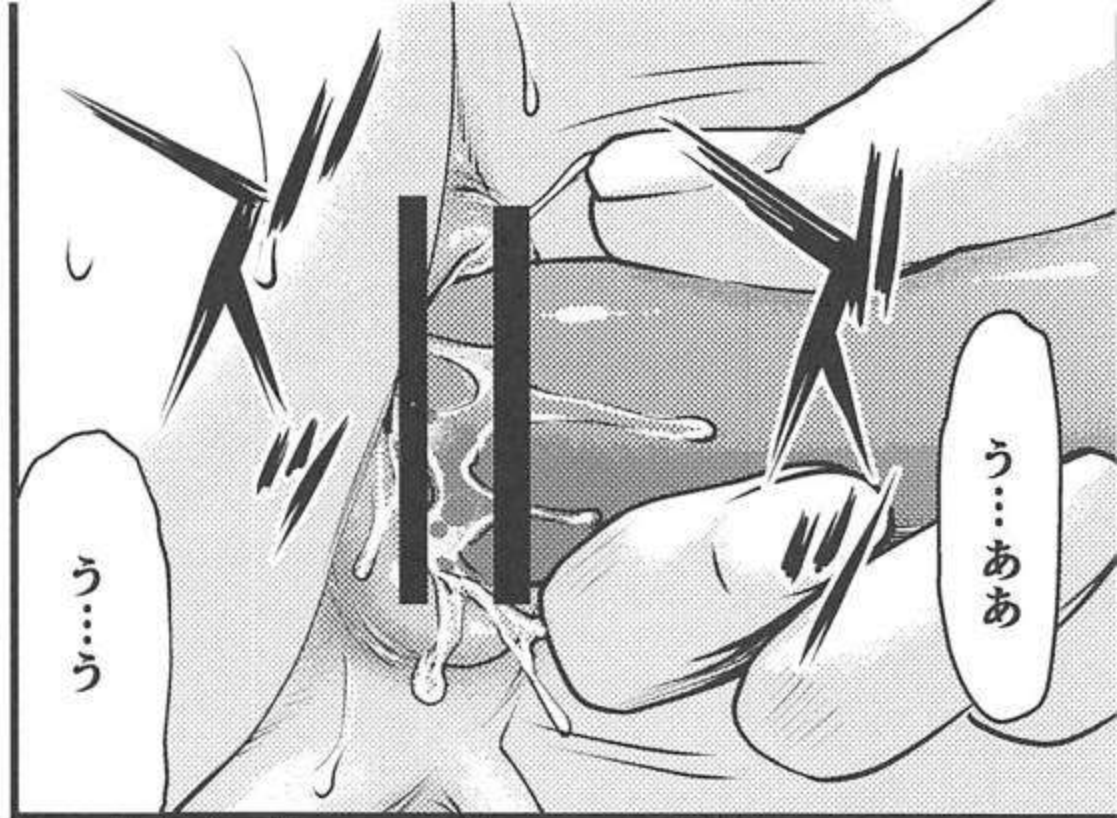
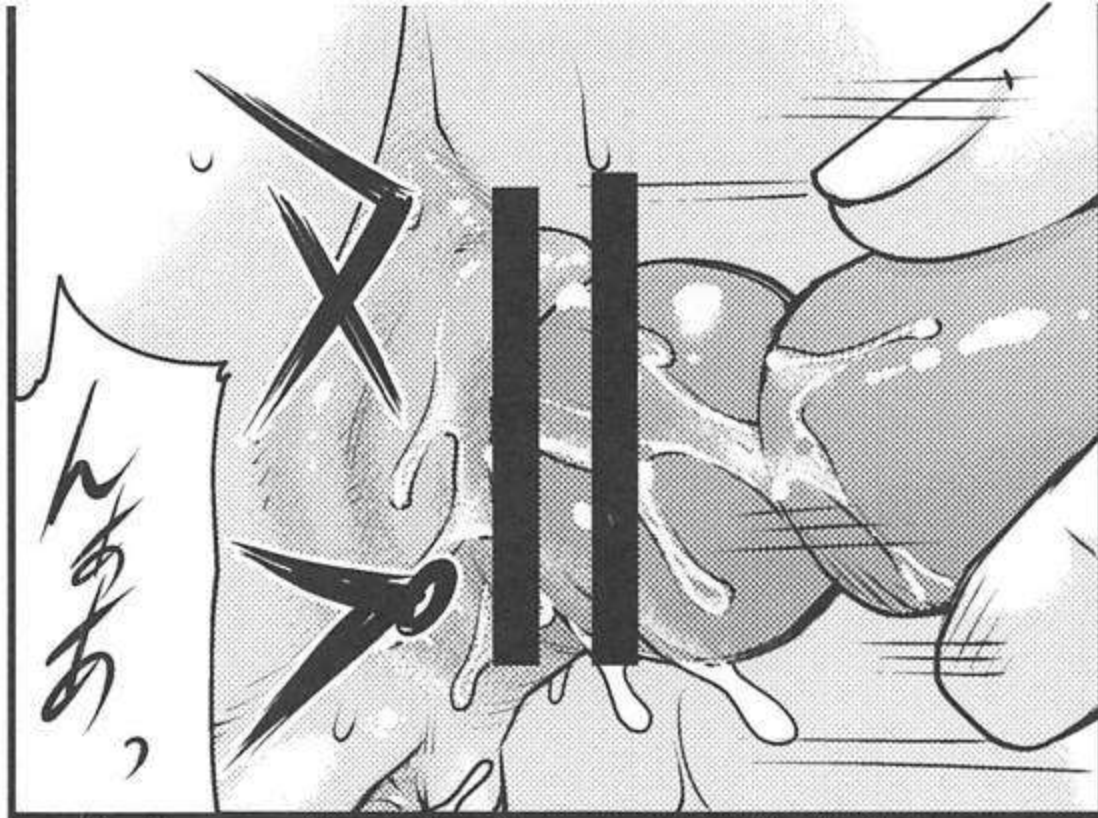
このたびはお買い上げありがとうございます。  
SSSS.GRIDMANがくろうさぎにおススメ、特撮と勇者系好きじゃろ。  
否定できない、少し観たよ。面白そうだった。  
最初はタイトルS.S.I.KULVULCAN(クバルカン)と見間違えた。  
F.S.S.の破烈の人形じゃねーかよ。  
次回の夏コミは四日間と変則になるようだね。  
要注意だな。  
ガルパン最終章第2話は6月なので、夏コミもいけるね!

12月某日  
HF第二章まであと少し

前回のあふすじは...



こんな感じでした。





肛門もこんなに  
柔らかくほぐれて  
もう食べ頃ね♡

あ...あ



あなたの腸液  
ホントに美味しいわ



何それ？

や...やめ

ちよっ...

大丈夫  
大丈夫  
♡♡

すごく気持ちよく  
してあげるから♡



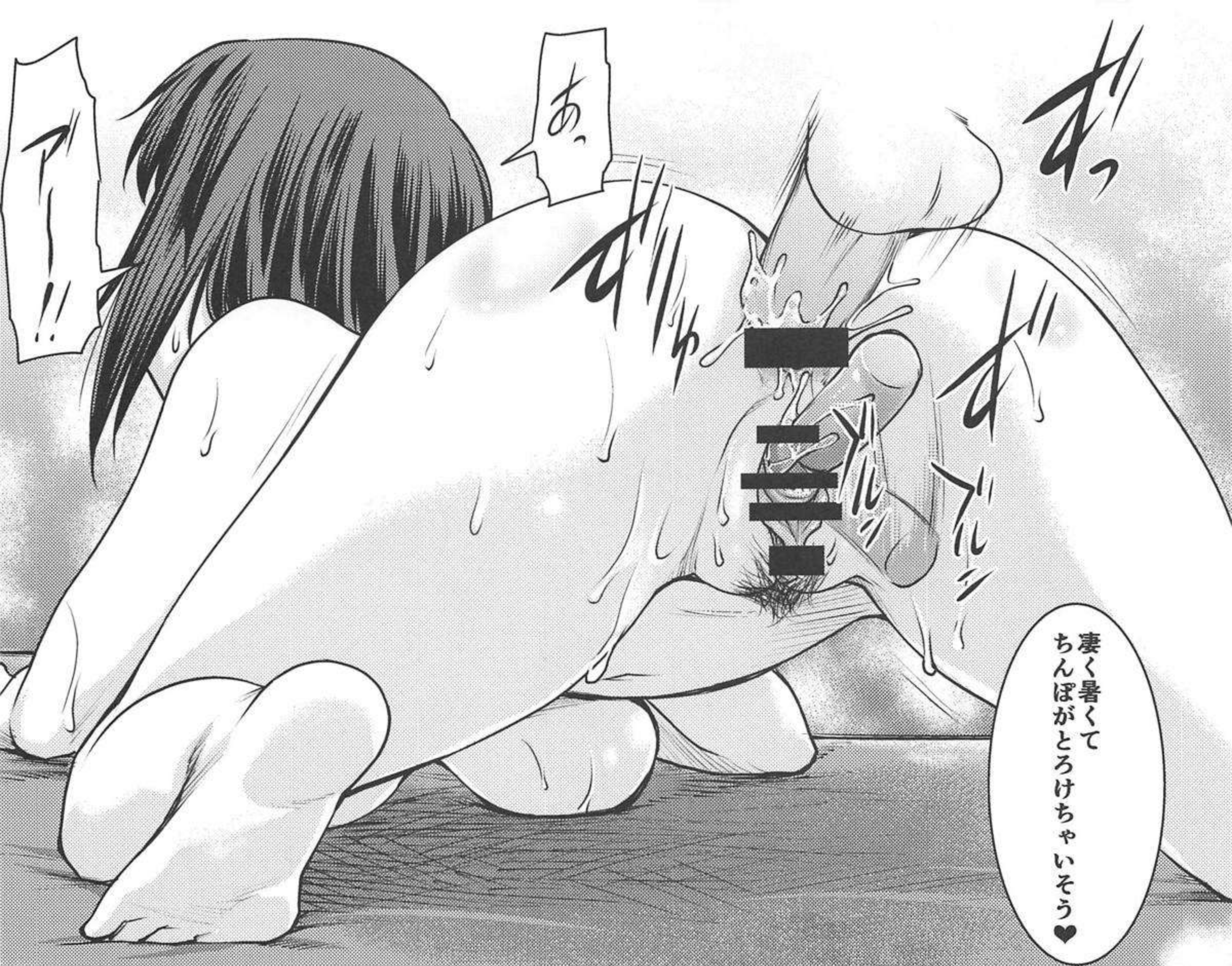
それじゃあ...



あ

や...ああ

[Redacted text block]



あ

あ

凄く暑くて  
ちんぽがとろけちゃいそう♡



あ...

アアッ



おお...

お...おお♡





あん♡

あん♡

あっ

やっ

んんっ  
は…ああん♡

すっかりちんぽが  
馴染んだみたいね

あ♡

いい顔して  
きたじゃない

ああ♡



ほああん♡♡

ああ

コッチね



それじゃあ次は…

あ

だ…だめそこは…



あ♡

あ♡

だ…だめえお○んこおおかしくなっちゃう♡

あ♡

あ♡

プリップリの精子であなただの膣内いっぱいにしてあげる

ああもう射精ちゃうわ



こんない穴久しぶりだわ



ああ

なんて気持ちのいい穴なのかしら



はぁぁぁぁぁ♡♡

うう…

ああ…あ♡

キキ



ああ...♡

あ♡

ええ  
どうぞ  
みなさんで



いいですよ  
減多に手に入らない  
上物です

ちやく  
ちやく



いっばい楽しみ  
ましようね♥

さあ河嶋さん

ああ…

あ…ああ

## 下着の魔女

一回の宿泊にかなりの金額が掛かりそうなホテルの一室のドアが開き女性が入室してくる。

魔女を模したような衣装だったが、よく見ると魔女っぽい雰囲気やデザインしたベビードールのようなだった。魔女のようなとんがり帽子を被っているが露出の高いベビードールとあつてるとは言いがたかった。

「おや、ハロウインは終わったのでは？」

悪ふざけのように魔女帽子を被りついているが、魔女を模した下着は彼女の妖艶さを演出している。

「ふふ、わたくしはおじさまの精気を吸い取る悪い悪い魔女なのですわ」

ダージリンは中年男の首の手を回し、身長差を埋めるために背伸びして唇を重ねてきた。

舌を絡め唾液をやりとりするねっとりとした熱いキスを続けていく。

「んッ、んッ……ちゅッ、んんッ、はあッ……ちゅる……んッ！」

二人は貪るように求め合っていく。男の中の嗜虐心目覚めてくる。ベッドの脇にあったバスローブの紐を使い、ダージリンの手首を拘束していく。

「よろしいのですか？これではわたくしがサービス出来ませんわ」  
「今日はこういう気分なのだよ……」

ダージリンの身につけているベビードールの後ろ紐を緩め、収まっていた乳房を露出させる。

気丈に振舞っているダージリンが、少し恥じらいを見せて顔を背けると、露出された乳房はベビードールに締められてより膨らみを強調していた。

手を下腹部のほうへと這わせ、ショーツへと伸びていく。視線をダージリンに向けると、こちらを見返していた。

その瞳を肯定の意を取り、ショーツを下ろし始める。膝あたりまで落としたところで、ダージリンの軀をベッドへと押し倒す。柔らかくクッションがやさしく彼女の身体を受け止める。

「あッ……」

男の手でショーツは足首より抜き取られカーペットの上に投げ出される。紐で縛られた手首を掴み、膝を乳房に届くほど深く倒し左右に開く。

「あッ……、あんッ、恥ずかしいですわ……」

まんぐり返しで組み伏せられたダージリンは羞恥に頬を染める。手首は紐で拘束され、下半身はひっくり返されて身動きが取れない。男の視線が恥部に集中しているのがわかる。ダージリンの下腹部の疼きが激しくなってくる。

「あ……、ダメ……、そんなに、見られ……」

「ダージリンのここは綺麗だからね、ずっと見てもいいくらいさ」

「あら、見てるだけ……、ですか？」

男は言葉に答えるかのように指を秘所に這わせる。指先が二枚の花弁を大陰唇ごと開いて中身を晒した。蜜液が流れ落ちてくる。

「ふふ、洪水のようじゃないか……、クリトリスもピンピンになっているよ」

男の言葉攻めと平行して、膣口に指を入れたり、クリトリスを弄り回す。

クリトリスは刺激に反応して勃起し、男の指が包皮の剥けたクリ

トリスを指先で愛撫する。痛みをともなう刺激が快感となって走り抜ける。

「あッ、ああッ……、はッ、はあ……」

秘芽に息が吹きかけられたと思うと、男はダージリンの股間に顔を埋めていた。熱い舌先で舐められ、ダージリンは声を上げ、反射的に太ももが男の頭を挟んでしまう。

「あッ、ああああッ、はッ、はあッ……、ダメッ、ダメです……わ」

静かな室内には、男がダージリンの秘所を舐める音が響き渡る。蜜液をすすり、陰唇に舌を這わせる。

「ああ、熱い……、いいですわ……」  
痺れるような感覚に実をゆだねる、ダージリンの身体に痙攣が走る。

秘所を舐めていた舌先は、クリトリスをパンチングボールのように弾いている。

「ひッ、ひあッ、ああああッ、いいッ……」

ダージリンは汗と涎と蜜液を垂れ流しながら悶える。男は尖らせた唇で秘芽を挟み吸い上げ始める。クリトリスを引き抜かれそうな吸引感に身体が震える。

「……ひッ、ひあッ……、ああああッ」

快感が振動となつて身体を揺らし、手を動かそうとすると紐の拘束が邪魔をする。脳がシェイクされ、視界が点滅するかのようになり替わる。

さらに執拗に男が陰核を吸い上げ、ダージリンの意識を爆風が吹き飛ばしてしまう。

「んんーッ！」

ダージリンは、下肢を引き伸ばして硬直した。

簡易な前手縛りで身体を投げ出して、壊れた人形のように横たわっている。黒と紫を基調とした魔女っぽいベビードールが乱れている。胸も秘所も丸出しになっていた。

中年男が、ベッドに体重を掛け、軋む音が響く。

ダージリンはぐったりとして起き出す気配はなかった。正体のないダージリンに覆いかぶさり、亀頭で秘所を撫で回す。

先走り液と蜜液を混ぜ合わせるように秘裂にそってスライドさせる。

「ん……」

ダージリンが目を開け、意識を取り戻す。男と視線を交わすが戸惑っているようだ。

「入れるよ」

男の放った言葉の意味を理解すると、下肢を男から遠ざけようと暴れる。

「あッ、ダメ、ですわ……、いったばかりなの……にッ」

暴れるダージリンの身体を押さえ込みに軽く覆いかぶさる。抱擁の下で身体をくねらせるようにうつ伏せになり、男が体をずらすと、ダージリンの臀部が視界に入り、腰を支えて臀部を持ち上げる。

引き締まったかわいい尻を眺める。すぼまっている尻穴もかわいいヴァギナも丸見えだった。

先ほどのクニリングスで興奮しているスリットは綻び、小さな花卉を開かせ、膣口からは蜜液が零れてくる。

スリット内の花びらが妖艶に映り、摘みたくなるような大きさを誇った。

ベッド脇のサイドボードからクリップを取り出すと、ダージリンのラビアにクリップを挟んだ。

「きやあッ」

ダージリンが悲鳴を上げ、反射的に腰を引くが、構わずに反対側のラビアにもクリップを挟む。二つのクリップが合わさることで密かな金属音を立てる。

「もう、悪趣味……、ですわね……」

突き出された尻を音を立てて叩く、叩くたびにクリップまで振動が伝わり、かすかな金属音が聞こえる。

「あああッ、ああッ、んッ」

甘い嬌声が響き、視界内にある膣口からは蜜液が零れる。

加減をし何度も叩く、臀部が熱くなり、身体が前後に揺すられる。振動が子宮を揺らし疼きを訴えてくる。叩かれるごとに疼きは痺れるほど激しくなってくる。甘い痺れが体に走り、スパンキングを快感に変化させているようだ。

「あああッ、ああッ！ ダメッ、ダメ、熱いッ！」

まだ縛られたままの手では身体を支えられず、臀部が叩かれるたびに脳髄が揺れる。身体の奥がどんどん熱くなって来る。

スパンキングを止めたときはダージリンの全身は汗にまみれていた。

ラビアのクリップが外されると、身体が解放感に包まれ、子宮が甘痛く疼く。

「はあはあはあ……」

ダージリンの呼吸は荒かった。スパンキングの間、身体を緊張させていて、今は身体が弛緩してぐったりとしている。その臀部を男の手がゆつくりと撫でる。

「あああああッ」

叩かれて皮膚感覚が過敏になっているために、触れられるだけでダージリンが全身を震わせる。

「ああッ、はあッ、はあはあ……、あッ……」

子宮の疼きは耐え難いものとなっている。子宮もお尻も、ラビア

までもじんじんと脈動していた。

中年男は、ダージリンの腰を抱えて持ち上げ、蜜液を垂らす膣口に龟头を押し当てた。角度をあわせてねじ込むように突き入れていく。

「あああああッ」

ダージリンが背筋を震わせ嬌声を上げる。膣壁は肉茎に絡みつき、そして熱湯のような熱さを感じる。

「ああッ、いい……ッ」

ゆつくりと突き入れていくと、膣壁が肉茎を吸引するように蠕動し始めた。ダージリンの濃艶な女体が男を受け入れていた。

龟头で子宮口を押し、蜜液があふれ出す。根元まで深く押し入っていく。

「痛いッ」

突き入れたときに臀部の赤くなった過敏部分に触れてしまったようだ。同時に子宮口も刺激を与え、痛みと快感を同時に味わせ混ぜ合わせる。

子宮の疼きがいつそう激しくなり、自分の膣壁が男根を引き入れて蠢いているのがはっきりとわかる。

「ううッ」

うなり声をあげ、男の腰がより早く突き入れられる。

「あッ、ああッ、あッ、ああああッ」

狭い膣壁をペニスが往復し、龟头の力りで膣の真ん中のスポットを搔きむしられ、ダージリンは浮遊感に浸る。深く突きこまれた衝撃は叩かれた臀部に伝い、子宮口を龟头で押されたときに貫かれたような衝撃も襲う。

縋り付きたいが、手首を紐で拘束されているために、肘で上半身を支えており、シーツを掴むしかなかった。

男の動きは徐々に激しさを増して、ダージリンを突き壊しそうな



勢いで打ち付ける。

「ああッ、ああああッ、ダメ、ですわッ」

身体が前後に揺さぶられ、ダージリンが呻く。子宮の疼きも激しくなるが、絶頂に上り詰めるために子宮が精液を欲しがっていた。

「せ、精液をッ、注いでくださいッ！」

精液を吸いだそうとする膣壁の蠕動に男の男根は締め上げられる。

「ああああッ、イクッ！」

ダージリンが腰を振りりと、背中を弓なりに反らし硬直する。

男が腰の脇を持ち直し、腰をぶつける様にしてペニスを膣奥深く挿入した。精液は子宮に向けて噴き出した。

ダージリンは、子宮に精液が染みていく熱さに浸っていた。あれだけ激しかった子宮の疼きが精液によって宥められていく。

浮かせていた腰が脱力で砕け腹ばい姿勢となり、ペニスとの結合が解かれる。射精途中の男根が膣口から抜け、赤くなった臀部に精液を振りまく。

尻の谷間、アヌスの下に開けたままの秘唇が蜜液と精液にまみれてヒクついている。

男はそのまま自分の肉茎を擦り、尻に精液を尽きるまで掛け続ける。

二人は、汚れを流すために浴場へ向かい、身体を洗い流し、良い温度の湯船に身を浸す。

湯船でダージリンは男の胸板に身体を預けながらくつろぐ。ふくよかな双丘が湯船から半分覗かせて、大きさを主張してた。

「ふふ、おじさまもお元気ですわね……」

「君の躰が魅力的なのがいけないんだよ」

「まあ、嬉しいですわ」

長時間、身体を絡めて溜まった疲れを湯船が癒してくれる。男のペニスが臀部に当たっているが徐々に力強さを取り戻しているのがわかる。

まだまだ、夜は長くなりそうだ……。

終幕

## 奥付

発行 リーフパーティー  
発行日 2018/12/31  
発行人 くろうさぎ

ホームページアドレス  
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>

印刷所 大陽出版様

18歳未満の閲覧禁止・無断転載  
インターネットなどへのアップロード及び公開の禁止



*LeLe!まごま*

VOL.34